

# 浅生重機先生の古稀をお祝いする

青 山 善 充

明治大学法科大学院教授・浅生重機先生には、2011年12月11日にめでたく古稀を迎えられました。心からお祝い申し上げます。また、2007年4月から今日まで5年間、法科大学院教授として熱心に学生の教育にあたられたことに対ししても、同僚の一人として厚く御礼を申し上げます。

浅生先生は、1964年に東京大学法学部を卒業、66年に司法研修所を修了（第18期）された後、東京地裁判事補を振り出しに、最高裁事務局民事局局付、秋田地裁判事補（仙台高等裁判所秋田支部判事職務代行）を勤められ、判事任官後は、東京地裁判事（東京高裁判事職務代行）、最高裁調査官、最高裁事務局民事局課長、東京地裁部総括、東京高裁判事、大津地家裁所長、東京高裁部総括と一貫して民事裁判官としての道を歩まれ、2006年12月に横浜地裁所長として定年を迎え退官されました。判事補任官から実に40年8ヶ月という長さです。

この経歴がそれ自体として大変輝かしいものであることはいうまでもありませんが、さらにその評価を高からしめたのは、裁判官として数々の難事件について下された新しい判決、時機に応じて世に問われた多数の論文や判例評釈によってでありました。実際、私（当時東京大学法学部教授）が浅生裁判官のお名前を知ったのは、「債務不存在確認訴訟」（新・実務民事訴訟講座第1巻、1981年）や、「請求の選択的又は予備的併合と上訴」（民事訴訟雑誌28号、1982年）という論文によってでした。前者は、その10年ほど前の私の判例評釈〔最判昭和40年9月17日〕（法学協会雑誌83巻4号）とは考え方が異なりましたが、その周到な論述が印象的でした。後者は、請求の選択的または予備的併合が控訴審ではどういう形で問題となるかについて、実務的に深く検討さ

れており、私は、このような学術的な裁判官がおられるのか、と認識を新たにしました。丁度その頃から、『法曹時報』に毎号のように浅生調査官の「最高裁判所判決解説」が掲載されるようになりました。

浅生裁判官は、多くの民事手続法の立法にも関与されましたが、中でも1991年から93年までの東京地裁民事21部部総括時代には、法制審議会「強制執行制度部会」委員として民事執行法制定に実務面から多大な貢献をされました。私は、部会の席（五十音順）が近く、毎回実務に裏付けられた浅生発言に強く共感したことを覚えています。

ご退官の1年ほど前、当法科大学院の同僚の小林芳郎先生から、司法研修所同期の浅生裁判官が法科大学院で教鞭を執ることを希望しておられるとの話を伺い、当時法科大学院長であった私は、即座に、是非当法科大学院にお迎えしたいと思いました。かねてから卓越した民事裁判官経験者を教授陣に迎えることによって、理論と実務のいっそうの架橋を図り、わが法科大学院の教育力をさらに伸ばしたいと考えていたからです。幸いにも、浅生先生には、ご退官の翌年4月から法科大学院専任教授として着任して頂きました。専任教授としてお迎えしたのは、——当法科大学院では、研究者教員は専任教授、実務家教員は特任教授として採用するのが慣例ですが——その研究者教員並みの研究業績から文部科学省の審査にも耐えうると判断したからです。

法科大学院教授ご着任後も、他方では弁護士活動、川崎市代表市民オンブズマンなど多忙を極める中で、浅生先生の健筆ぶりは一向に衰えませんでした。2007年4月から3年間の著作については、明治大学法科大学院発行の『自己点検・評価報告書』第2号（2007-2009）に掲載されていますが（173頁）、それ以後も、例えば、「建物の占有と土地の占有」（判例タイムズ1321号、2010年）——なお、この続編が本誌本号掲載の「土地建物の占有と建物買取請求権」とのことです——、「手形の商事留置権と民事再生」（ジュリスト1400号、2010年）、「支店間支店番号順序方式による預金債権の差押えとその申立ての適法性の有無（判例評釈）」（判例時報2123号、2011年）など、いずれも近時の重要な手続法問題についての鋭い論稿を発表しておられます。

教育者としての淺生先生について述べますと、淺生先生は、当法科大学院で民事訴訟法、民事執行・保全法、要件事実・事実認定論、担保法を中心とするその担当の授業において、きわめて熱心に学生を指導されました。とくに、これらの科目のために独自の教材や自習問題を作成され、この分野がとかく弱い法科大学院学生のために、懇切な講義や演習を展開されました。

それだけではありません。法科大学院の民事訴訟法の講義、演習を担当する教授陣は、開校以来、「チームによる教育」を行ってきました。それは、拙稿「法科大学院の発足と法学教育の方法」『暁の鐘ふたたび』（明治大学法科大学院開設記念論文集、2005年）に書いたとおり、毎週1回集まって、教材や問題の作成、授業内容や採点の打ち合わせ等を行うことによって、研究者、弁護士、裁判官経験者からなる教授陣の教育の質の平準化と向上を図るものです。淺生先生も、毎回この会合に出席され、時には喧喧諤諤の議論に割って入られることもありました。淺生先生の論法は、諄々と論理を展開し自説を曲げぬもので、あたかも判決理由を聞くようでした。楽しい思い出です。

また、ある時、私が、法科大学院に来られて困ったこと、苦しいことはありませんか、とお尋ねしますと、「困ったとか、苦しいと思ったことは一度もない。それどころか、法科大学院の教員はまことにやりがいのある素晴らしい経験です。一番嬉しいのは、学生から民事訴訟法が理解できるようになったという感想を聞かせて貰えることです。」というお返事でした。それでは民事訴訟法を学生に理解させるためにどういう工夫をしていますか、という私の問いに対する回答（メールで頂いた）は、次のようなものでした。

- 「1 民事訴訟法をの概念を、平易な言葉で言い換えて理解させること、
- 2 民事訴訟法の立体的構造を形作る、重要な原理原則を学生自身が当事者や裁判官の立場を立った場合にどう考え行動するかというように、体験的に理解するように仕向けるようにして、修得させること（民事訴訟法の立体的理解）、
- 3 学生に、民事実体法の要件事実を修得させ、それにより、民事訴訟法

の原理原則を理解させること（要約していえば、要件事実民訴法）、

- 4 民訴の重要問題では、そこで保護されるべき法益とそれと対立する法益が何かを理解させ、その対立する法益を天秤ばかりの2つの皿に載せて、どちらが重いかを検討するという思考方法を習得させること。そして、この2つの保護法益の調整とその内容が、民事訴訟法の規定内容、すなわち、民事訴訟法の要件事実とされていること、を理解させる教育方法をとること（対立する法益の利害調整としての民訴法）、
- 5 自習問題を提供して、答案を添削し、上記の民訴の学習方法に慣れさせること（民訴法の理解には、慣れが必要）。

このような方策をとることにより、学生から、理解できたという言葉聞くことが、もっとも嬉しい、楽しいことです。」

ここに、研究者であれ、実務家であれ、法科大学院で民事訴訟法を講ずる者の心得るべきエッセンスが集約されているのを見る思いが致しました。それは、一言で言えば、自分が学ぶ立場に立って学生に教える、ということです。この姿勢で、浅生先生は、5年間にわたり当法科大学院の教育にあたって下さいました。

この度、定年の故を以て明治大学をお退きになりますが、残った者は、浅生先生の姿勢に学びつつ、今後いっそうの力を傾注して法科大学院教育にあたるのが、これまでのご貢献に応えるべき道であるとする次第です。

最近、石本隆一の短歌（『赦免の渚』）に、

古稀<sup>しやめん</sup>ということば赦免のひびきあり 近づくほどにすずしき渚

があるのを知りました。浅生先生は、おそらくこれまで裁判官として、また法科大学院教授として、人一倍厳しく自己を律して来られたように思います。古稀を過ぎたこれからは、そうした窮屈な社会の頸城から少しはご自分を解放することも許されるように思います。「七十而從心所欲不踰矩」（論語）です。少しく自由な空気を味わいつつ、ご健康に留意され、ゴルフを楽しみ、人生を楽しまれながら、ご活躍されることをお祈りして筆を置きます。